特44
86

265
109

中庸

意绪

明治
43. 6. 27
内交

己酉初夏

柳江題

松の廊下

玉蘭作

さても元禄十四年三月十四日の東雲に

當時の將軍綱吉公勅答あらむ賀日とて

大名小名悉皆く柳營さして登城あり

中にも淺野内匠頭長矩は勅使饗應の役なれば

他に先んじ種々に
心を碎き居たりけり
爰に吉良上野介義央は
式作法の師範とて
等しく未明に出仕為し
指圖に親疎の偏頗あり
人もなげなる擧動に
驕る狀こそ奇怪なれ
やがて勅使の登營に
間もあるまじき空の色

夜はほのぐと明け初めて
威儀を正し諸大名
袖を連ねて居流れしは
糶き渡る星かとも
見ゆるばかりの晴の場
いとも光榮ある景色なり
此時内匠頭は玄關にて
上野介に出會ひければ
勅使たん迎ひの其砌
石垣の下まで進むべきか

但し御箱段にて可然や
いとしとやかに問はれしに
今に於て是程の事
貴公の如き不束者
皆寛大の御治世よと
御教示仰ぎ候と
吉良は傲然聲荒く
質くは粗忽の至なり
よくも役儀の勤まるも
衆人中に嘲笑りつ
尻目に掛けて入りにけり
餘りの過言に手に汗握り
浅野内匠頭長矩は
一時に嚇と憤怒を發し
狂ふが如く追ひ縋る

左右に扣へし旗本衆
伏目に成りて居たりしが
今の雑言日頃の無念
兩眼血走り獅子奮迅
上野介しばらく待て

此程よりの汝が無禮
覺悟をせよと喚きつゝ
眉間に發石と切付けたり
衿首丁と薙ぎ拂へば
今一太刀と振翳す
最早堪忍成り難し
小さ刀を抜き放ち
切られて遁る上野の
吉良は前にぞ打倒さる
内匠頭の背面より
梶川與三兵衛走り寄り
内匠頭は聲振上げ
放ち給へと悶躁けども
無念々々と悲みつゝ
心の中やいかならむ
兩手を抱へ組み留めたり
武士のなさけに候ぞ
梶川遂に放たざれば
怨恨を呑みて囚れし
思ひ遣るだにあはれなり

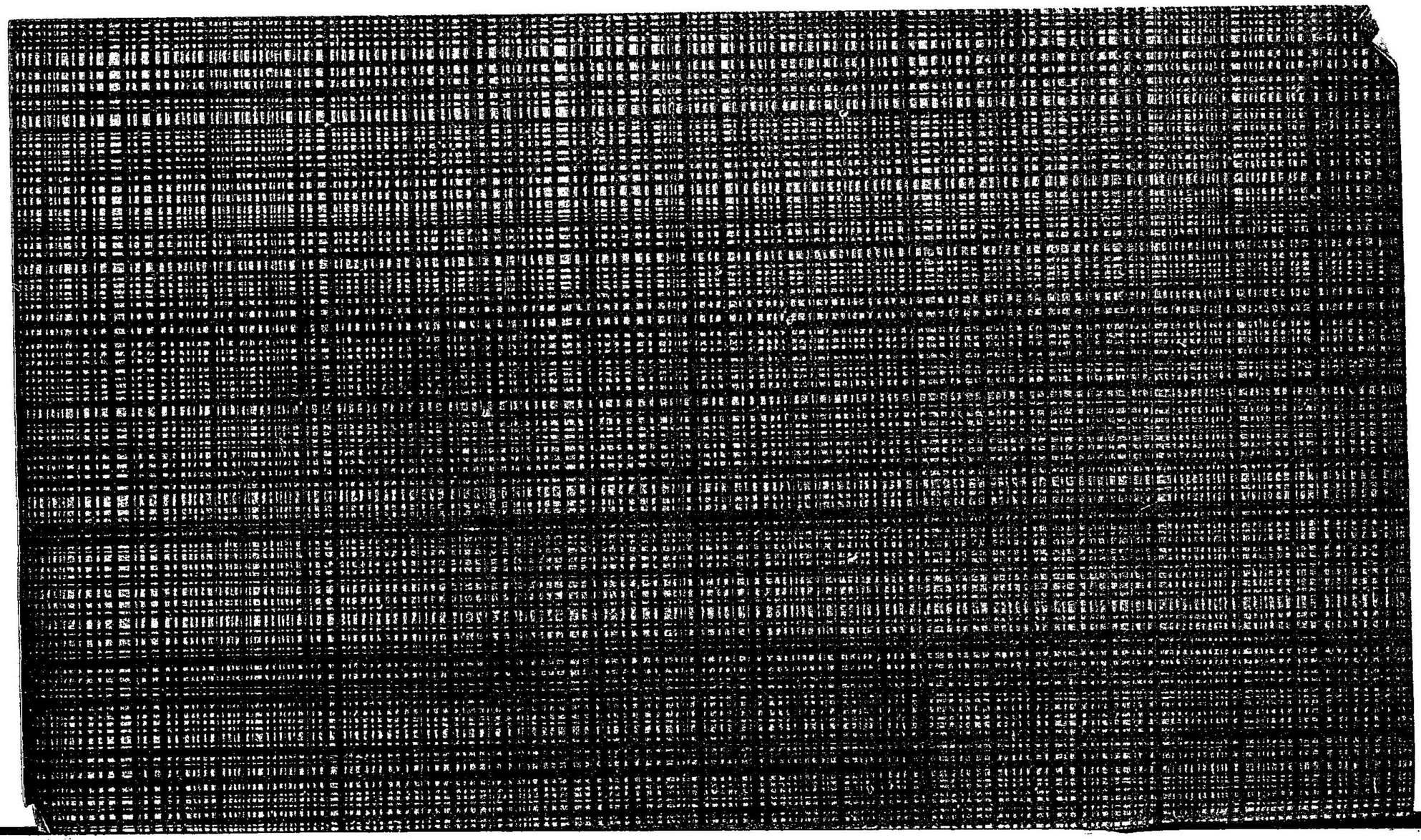
嗚呼内匠頭一朝の怒に因り
大事を終にあやまれり
實に名に負ふ大石の
亡君の怨敵を鳥が啼く
泉が岳の苔の下
美名を千古に傳へけり

身をも家をも打忘れ
されど重き任務を身に帯し
盡す忠義に時を得て
吾妻に名高き高輪や
美名を千古に留めけり

明治四十三年六月十日印刷
仝　四十三年六月二十五日發行

發行兼編輯人　大阪市東區和泉町二丁目一番地　有村彌四郎

印刷人　大阪市東區和泉町二丁目一番地　藤井護三郎　電話東四五五九番

印刷兼發行所　大阪市東區和泉町二丁目一番地　藤井改進堂　長電話東二七〇番

265
109